ZINE・17 ― 2018・秋

# 能登の風に吹かれて　県評オルグ 20 年

## ――多名賀哲也さんが語る――

生・労働・運動ネット　富山

# はじめに

多名賀哲也さんは、80 年代から石川県を中心に、労働者、住民、市民を巻き込んで、その先頭で、「専従オルグ」として労働運動、反原発運動を進めてきました。北陸に多名賀ありと注目された人です。

その立ち姿は、周りにいる者を元気づけ、これからの運動に希望を与えてきました。

その熱意、運動観がどこから出てきたのかを、多名賀さんの青年期、専従オルグ期を中心に話を聞き、みなさんと共有できたらと、「能登の風に吹かれて―県評オルグ 20 年」として発行します。

ぜひ、多名賀さんのエネルギーにふれてください。

# 能登の風に吹かれて　県評オルグ 20 年

## 多名賀哲也さんが語る

Q：聞き手

## 血の気の多い青年期

### □　学生運動･社会運動･政治運動との出会い

**高校 3 年生　(1960 年)**

**Q：　はじめに運動にかかわった頃の話から聴かせてください。**

じゃ、「60 年安保」の頃から話すよ。「60 年安保」の時はちょうど高校 3 年生で、今でもその時のことをいろいろ覚えとるわ。僕が通っていた宮津高校は、京都北部の田舎の学校で、何の運動もない。ヤキモキするばかり。水泳部の練習の行き帰りに思いを語るぐらいだった。

一服する多名賀さん

京都の鴨沂（オウキ）高校では、民青系の全学連ではなく、安保全学連のデモに参加したということが、僕の高校の中でも話題になったことを覚えている。翌年、大阪市立大学へ入学した。

### □　京都府学連(ブント系)、大阪府学連(民学同系)、兵庫県学連(フロント系)

**3 つの学連が協力して、学生運動を**

「60 年安保」と「70 年安保」の間が、僕の学生時代やったから、だいたい全国的にみると全共闘運動や「三派全学連」が始まる前だね。その中で、関西では、かろうじて大衆的な学生運動をしている京都府学連・兵庫県学連・大阪府学連の三学連があった。それぞれ指導グループは違っていて、京都府学連はブントや。それから大阪府学連は民学同、兵庫県学連というか神戸大学が統一社会主義同盟で、いわゆるフロント。それぞれ運動を指導する党派は違うけれども、大衆的な学連運動ということでは、お互いに協力し合いながらいろいろ活動していた。

### □　大学院へ入ろうと 1 年留年し、勉強をしていた　(1966 年)

**学者になる？　運動をする？　血の気の多さが･･･**

僕は大学卒業後、大学院に行こうと思って卒業を一年延ばしたんや。

大阪市大の経済学部を卒業して、大学院を出て自分も学者になりたいと思っていた。1年留年して、半年間、大学院受験のための勉強やっとるうちに、とても自分の血の気の多さでは、当時の講座制の下では、助手･講師･助教授という長い下積みの期間、大人しくしているなんてとてもじゃないが無理やろなあという思いがしてきて、それが 65 年や。まだ 67 年の「10・8　第一次羽田闘争」が始まる前やった。血の気が多いと強く自覚したのは、自分が大学院へ行こうと、そのための勉強や準備を始めたときやった。先輩や同級生、下級生たちには、大学院に入ってそのコースに乗ってる人たちはいた。あの当時、安保全学連「主流派」をリードしていた人たちは、結構大学院に入っていった。

ある人は、愛知大学の学長になっている。理論的には、自分はその人たちから、かなり影響を受けたりしていた。そういう人たちと自分を比較して考えてみると、とてもそんなふうにはできないなと思ったね。そういう意味では、このあたりは会社でも何でもそうやけどね、一応既存の社会組織の中に入るためには頭下げにゃいかんことも多い。けど、「オレは、やっぱり、そうはできないな」と感じていた。学連運動をやっとる時は、そんなこと何も考えんかったけど、自分なりの人生構想を考えて大学院を目指し勉強を始めた頃、血の気が多い自分には、これはとっても無理やなあ、と思うようになった。

僕は完全な安保世代でもない、完全な全共闘世代でもない、運動の端境期に青春をすごしたんや。その後でも、いつも端境期にいる気がするね。

## □　運動へ向かう根底に

### 1943 年 3 月 19 日生まれ　戦前の空襲をおぼろげに記憶

僕は完全な戦後世代だと思われているんやけど、そうじゃなくて小学校 6 年になる頃まで、空襲、特に爆弾の直撃と機銃掃射の悪夢に、毎晩のように夢でうなされとったんや。僕は、東京で生まれたんやけど、戦争中 1 歳の時に宮津に疎開してきて、そこで大きくなったんや。

戦前は、近くの舞鶴に鎮守府があり、重要な軍港だったんで、米軍の爆撃はいつもあった。舞鶴から駆逐艦など多くの船が宮津の方に避難していた。軍艦ばかりではなく、宮津の市街地も爆撃を受け、知り合いの女の子も防空壕が直撃されて死んどる。

有名な「伊根の舟屋」のある伊根村や上宮津村では、まるで狩りを楽しむように、米軍のパイロットが機銃掃射をしたという。本家の祖母から、その恐ろしさをよく聞いたもので、今でも忘れられん。そういう話が潜在意識の中にあって強烈な恐怖感が残ったんだと思う。

## 労働運動の「いろは」を身につけた

### □　神戸で自治労書記局に　（1966 年）

**1966 年から 1981 年**

当時、「三派学連」は、みんな労働運動とのつながりを持たないかんということで、卒業してから、あちこちの組合の書記局に入っていっとった。これは、全国的な流れで、もちろん革マルや中核なんかもそうだった。

僕も市大を卒業して、いろいろな出会いというか縁で、自治労の兵庫県職労の書記局の仕事を紹介してくれた人がいて、そこへ行ったんだよ。1981 年まで神戸におったが、神戸では、神戸市職に次いで大きい組合である自治労兵庫県職労の書記局員として 15 年間仕事をしていた。

**15 年務めた書記局の仕事は自分のやることではないと退職**

石川県に来る 2、3 年程前から、かなり限界というか、「燃え尽き症候群」というか、この事務局の仕事は自分のやることではないなと思って、1981 年に兵庫の自治労を退職した。

### □　「お遍路」さんになり、迷いを吹っ切る(1981 年)

**堅気にもどる？　ヤクザな稼業を続ける？**

退職してからどうするのか、ものすごく迷った。迷った末に、誘いのあった石川県へ行くならば、ほんとに骨を埋める覚悟で行かなきゃならんと思った。兵庫の自治労の書記局員として全うできなかったわけだから、どうするのかということもあって。今は正直に話すけれど、その時は、「もう労働組合みたいなヤクザな仕事は辞めて、なんか堅気の仕事にいちからやりなおそうかな」と迷っていた。

それで、何をしたかと言えば、「四国 88 カ所巡り」、つまり、お遍路や。1981 年の夏だな。

**お遍路として札所めぐり、再度運動稼業へ**

1 番札所から 37 番札所までしか行けなんだけど。寝袋担いで、野宿しながら歩いて。それで、「やっぱりオレはヤクザな仕事しかできひんなあ」と思った。「お大師さん、それでもいいですか」と尋ねて、「もう一回やり直す気で頑張ってもいいかなあ」と思って、こっち（石川）に来たわけだよ。お大師さんのところへお遍路で廻って、そこで決めたということなんだけどね。

もうその時には、自分がそれまで身につけていた運動の世界の理屈なんて、全然関係

ない。お大師さんと一緒に歩いて、「それでもいいよ。あんたはヤクザなことしか出来ないよ」と言われたんやね。

そんなら、せっかく声も掛けてくれたんだしと。何度かこっちへ来て、石川県評の粟森喬さんに会うてね。それでこっちへ来ることになったんよ。

まあ、人間の世の中は不思議なもんで、ちょうど兵庫の仕事がだめになってどうするかと思っていた時に、声が掛かった。その声を掛けてきた人は、NTT 労組から連合の本部に移って、最後は中央労働委員会の労働者委員になったんだけど、その人が市大の先輩で、粟森さんとも知り合いだった。労組幹部として大変有能な人だったけど、思いはブントそのものやったね。そんな人だから、結構、争議で労働委員会に持ち込まれたいろんな組合に頼りにされてもいたんやけどね。

## 石川県評オルグ、羽咋地域担当として

### □　地域労働運動　反原発運動を進める

#### 羽咋に住居を定め、金沢と羽咋を往復しながら活動　1982 年～

神戸では、僕はこういう性格やから、いろいろなことをやったけども、労働組合の中でも、組織の中でいろんなことをやってもそのベースをきちっと守りながらということができなんだね。やっぱり血の気の多さが災いして。

それで辞めてどうしようかなあと思っているときに、石川県評からの話があった。まあ、その時に大阪市大の安保全学連で頑張っとった人が、これまたなんでか知らんけど電通（今の NTT 労組）の中央本部の書記局に入っとって、ちょうど、石川県評の事務局長やっとった粟森喬さんが同じ NTT で、奥さんのまちこさんも中央本部の役員に出ていることもあったんでしょ。ほんで、僕のことをよう知っとる、その人から「石川でオルグ探しとるんやけど」と声がかかった。

もうそろそろ民間では、「労線統一」で「連合」へ行こうとする流れも本格的になっていて、「今の時代、県評のオルグになって、本気でそこで骨埋めるというような人はなかなかおらんから、あんた、来てくれんか」とはっきり言われたよ。だから当時の、例えば北鉄の若手の人が県評のオルグとして入って来ても、それはそこで骨埋めるんやなくて、また北鉄労組に戻って、それなりの地位に入っていく。完全なプロパー（専従）で県評のオルグになるという人は、なかなかいないという時代になっとったんやね。

しかも、羽咋に配属されることはもう決まっとるわけだけど、なんで羽咋へ配属するかと言えば、「羽咋が大切」ということじゃなくて、「志賀原発反対運動」の方もやってもらわないかんということだった。住民運動や市民運動の世話（？）もせないかんと。そんなこと言いだしたら、当時のそんな労働組合の状況の中で、プロパーのオルグになる人がなかなか見つからんで、なり手がいないということで、誰かおらんかと。それで先の先輩から、「哲ちゃんどうや、行ってみいひんか？」と話があって、結局こっちへ来

ることになったんよ。

**Q：　多名賀さんは、こっちに来た当初どんな感じだったんですか。大変だったんじゃないですか。**

まあ、途中いろいろあるんだけれども、一番決定的やったんは、ちょうど 90 年を境にして「連合」が発足するでしょ。だいたい中央から 1、2 年のタイムラグがあって、各都道府県で「連合」の組織ができる。その時に石川県評も解散した。それで石川県評から平和運動センターに組織替えすることになった。当時、石川県評に専従役職員が８人おったかな。

専従役職員の８人のうち、地域に配属されとったのが羽咋の僕ともう１人とで能登が２人で、あとは金沢と小松で２人。だから、残りの事務局長以下４人が本部付きで、出先配置が４人。「連合」ができてからは加盟費なんかも大幅に減るから、出先配置している４人継続配置する余裕がなくなって、本部４人だけということになる。

**Q：　地区労と県評の関係は？**

形式的には上下関係じゃないのだけれど、実際はあったと思う。ただ、同盟のようなトップダウンじゃない。運動的な上下関係はあっても、実際の方針を決めるのは「現場」だから、権力的な上下関係はない。自分は、羽咋郡市地区労の専従ではなく、県評の専従として地区労の強化のために配置されたということになっていた。両方に籍があるということではなく、あくまでも籍は県評にあった。

## □　羽咋に骨を埋め、反原発運動も労働運動も　合法領域の確保・拡大

**Q：　多名賀さんは、石川県の労働運動や県評運動にどのように関わっていたのですか。**

その前に兵庫の自治労組合におったときは、個人的には、仕事を離れていろいろなことはやったんだけれども、それはオルグという役員的な立場ではなく、仕事では自治労職員としての実務に限られていた。やっぱり、地域労働運動であるとはいえ、羽咋では、専従オルグとして自分なりの判断や努力がものを言う世界であったわけで、ある意味でおもしろかったし、やりがいがあった。

自分がいわゆる「過激派」であったときからもそうやけど、石川県評へ来てからも、労働運動の「合法領域」で絶対に運動を貫徹するんだ、と思ってきた。会社とのなれ合いでなく、自分たちの運動で「合法領域」を確保し、拡大し、強めていくんだと。それが労働運動の基本だという思いは、ずっとあったね。

こういった考え方は、「合法主義」とか、「日和見主義」とかと言われていた。大学のときに一緒だった人で赤軍派にはいった人もいるが、学生時代から、そのような人とは袂を分かっていた。革命運動ならともかく、そうじゃない、普段の運動ってのはあくま

でも「合法領域」を確保し、拡大していくのが基本だよ、というのが自分の発想としてある。そういう発想が、自分が職業として 30 年間、労働運動でこだわった一番大きなところや。

またそうでなかったら、いわゆる「議員族」といわれる社会党系の人たちとこれだけのつながりをもつことはなかったと思う。

**Q： 多名賀さんの言う「合法領域」には、これがギリギリの線だという限界はあるのですか。**

「合法領域」は、これ以上行ったらダメという、限定されたものではなくて、関西生コン労組の運動でも、一方では経営権をめぐって闘争をやっとるでしょ。彼らであっても、別に職場でストレートに「革命闘争」をやっとるわけじゃなくて、運動の「合法領域」を闘いの中でちゃんと確保・拡大・強化する運動をしとる。

ある意味では、「経営闘争」みたいに労働者が現場でどんだけの発言力を持つのかという、そのあたりで戦略的な運動をやらないと、自分たちの身分を守れない。そういうことをどれだけ拡大していけるかということだよ。労働運動の「合法領域」というのは、限定的なものじゃなくて、それを運動の中でどんどん拡大していけばいいんで、「合法」かどうかといったギリギリ・すれすれのところということじゃない。

最近は、運動の「合法領域」を自分たち自身の力で確保するという、そのことができなくなっちゃって、「労働基準法」といった法律とか、法律に書かれたことさえ守らせることができなくなっちゃっているし、「労働基準法」自体が完全に空文化してしまう事態になっていて、労働運動がなくなってしまっている。じゃあそれに対してどうするかというのは、自分が専従オルグを辞めてからは、実際上なかなか難しい。

社会党であれ、共産党であれ、新左翼的であれ、自分たちが責任をもって運動を保障しぬくという強さが必要だと思うね。そういった枠をはずすと何でも無茶苦茶になっていくし、それを抜きにしてあれこれ言うと、運動がおかしくなっていく。反原発闘争のときでも、そうだと思っている。自分は、そういった原則的なことは確実に守ったと思うよ。

## □ 地域労働運動を切り開く

**Q： 多名賀さんが地域の労働運動でかかわってきたことの中から、今まで聞いていないようなことを聴けたらと思っています。**

地域の「困りごと相談」でも、けっこういろんなことがあったよ。こんな田舎やけど、労働争議もあったしね。

## 組合役員狙い撃ち解雇　解雇撤回に粘り強く１年

たとえば、羽咋の自動車学校の労働組合を、会社側は大人しい「御用組合」にしようと考えて、組合結成に力があった人を首にするということがあってね。それに対して、毎月、地区労の動員をかけて、そこのオーナーの家の前で、抗議行動をやって、その周辺には、ビラ入れと街宣を続けたよ。2 年ぐらいかかるかなと思っとたけど、1 年間で復職できた。

## 小さな組合の結成にかかわる

それから、原発の問題はあるけれども、僕がかかわったのは、今の志賀町で旧の富来町にある日本海ハーネスの労働組合やね(現在は、会社解散で消滅)。大雪の中、何べんも通って労働組合を作っていった。当時は峠道だったから、大変だったね。労働組合の結成を「公然化」する前日は、みんな一度さりげなく家に帰ってから夜にまた集まって、連判状に判を押してもらった。そして、翌日の朝、全国一般の役員に来てもらって、メンツを揃えて会社へばっと行って、「労働組合結成通告書」を手渡したよ。それを受け取った会社の役員の手が震えているのを見て、痛快やった。当時の町議は市川さんだったが、この結成は、今、町議をしている堂下さんが中心になって取り組んだことだよ。

## 困りごと相談から女性差別賃金撤回へ

羽咋地区労でやっていた、いわゆる「困りごと相談」では、相談事がけっこうあった。その中で代表的なのを一つ言うと、すぐそこの羽咋駅前の「石川検米」での女性労働者に対する「雇用差別問題」があったよ。今よく言うようななんとかハラスメントではなく、明らかな「雇用差別」や。子どもを出産して、子育をするようになったら、身分を変えるという差別的な待遇をしたんやね。その羽咋支所へ地区労の宣伝カーをつけて、最後は、金沢の本社との交渉に入った。毎年春闘のときに地域ビラを入れるんやが、彼女はそのビラを見て相談しに来た。組織問題になるから、自分たちが個別の労働組合には、余程のことがないかぎり介入することはないけれど、そのように労働組合が取り組めてない問題に関われるのが、地域の中の「困りごと相談」なんだよ。

そういった労働組合の結成や解雇撤回闘争といった、はっきりとした取り組みは、かつて自分が兵庫自治労にいたときには考えられなかった。そのように、地域の中でお互いの顔の見える関係の中で運動したり、直接に個々の組合の問題にまで踏み込めたりするのが地域組織だから、そういう形で自分として地域でいろいろと力になれたんじゃないかな。やはり、労働組合の結成や組合結成後の解雇撤回闘争を経験できたのはよかった。

一年間解雇撤回闘争をやり続けたのは、羽咋地区労としても、僕個人としても初めてのことやった。昔の「過激派」の労働運動の血が騒いだね。しかし、今は、そういった

ことは、なかなか難しいかもしれんね。昔はけっこうあったんだよ。別に「過激派」じゃなくても、全金や全国一般など、昔の中小労働運動では、解雇撤回闘争やストライキというのは、当たり前ことだった。大阪の南部の田中機械なんかは、会社が労働組合から多額の借り入れを受けていたのに、「経営破綻」を理由に従業員の大量解雇を行ったんで、労働組合がそれに抗議して占拠した工場で、10 年間も、「自主生産」を行ってたよ。田中機械の労組の闘いのことは、労働運動をやっている人間は、みんなよく知っとった。

## □　羽咋市と北電羽咋支店幹部の突然の訪問に怒る

**Q：　地区労、住民運動、市民運動などが渾然一体になって、原発を阻止しようと多名賀さんは活動を進めてこられたと思いますが、労働運動の転換時にどのようなことがありましたか？**

「連合」が発足して、県評が解散・縮小するという労働組合の組織変更のごたごたの時に、「多名賀さん、金沢のお住まいはもう決まりましたか。よろしければ、ぜひ、金沢の新しいお住まいをお世話させていただければ、と思いまして」と言って、羽咋市と北電羽咋支店の幹部が二人そろってやって来たことがあった。その時は本当にアタマにきたよ。あの当時、すでに志賀原発訴訟の原告団は動き始めていたけれど、自分が席をおいていた組織も人事異動があって、羽咋地区労も単独で僕を雇う余力はないので、金沢の本部に異動になった。僕は当然地区労に力が無いことは分かっていたけれども、羽咋の住まいまで替えたんでは一切だめになるなあと思っていたんで、住む場所を替える気はなかった。

90 年当時に、なんで羽咋市と北電の幹部が来たんかははっきりしとるわけで、その前の 86 年から 88 年にかけて、原発建設工事の着工に対する同意の問題があって、志賀町では同意は簡単に取れているんやけど、周辺自治体では同意に関わる問題があって、特に羽咋市では、大もめにもめたわけやね。それに懲りたんで、「金沢に行って、そこで大人しくしていてください」ということやったんだろうね。つまりは、能登で反原発運動の要にいる僕を金沢に住まわせることで、運動を弱めたかっただろうな。

**Q：　そのとき、羽咋市の環境審議会の委員というのをやっていましたね。**

どの回でもそうだったんやけれども、必ず傍聴者を入れることを認めさせて、羽咋市では、５回ほど環境審議会を開かせた。他のところは１回で了承、同意で終わりなんやけれども。

結局、最後は「危険区域は 30km だということを最終的に答申としてまとめますから、多名賀さんもそれで文句言わんでください」ということで、何とか審議会を終えたんやね。でも、そのことで、向こうは懲りとったわけよ。だから、「30km 圏」が危険区域というのは、別に今度の「3・11」で初めて問題になったわけではなくて、あの当時の審

議会の答申で出ていて、すでに羽咋の公式の見解として決まっとったわけや。「危険区域が『10km 圏内』というのはおかしい。最低でも『30km 圏内』や」ということでね。何で「30km 圏内」と向こうが言ったのかというと、まあ一応「チェルノブイリ原発事故」を念頭に置いたんやろうね。

だから、自分にとっては、その時が、腹くくってこっちでやらんないかんなと決めたときや。働かんわけにはいかんし、もちろん仕事で金沢まで通勤した。でも、せめて住まいだけはこちら(羽咋)に置くことにした。そうなったからといって、その後も反原発運動の事務局長をやっとったから、みんなはあんまり変わったとは思わなかったみたいやね。

## □　組織の大転換の中で　1989 年～ 1990 年

あの県評解散当時の財政力から言うたら、こっちに人を配置しておくような力はもう無いからね。平和運動センターはその当時は前後（ゼンゴ）さんが事務局長になっていて、後は私も入れてオルグが二人。そして、女性の職員が１人ということで、メンバーが８人から４人になったということや。かつては４人の地域配置であっても、いざとなったら本部も入れて８人で取り組めるわけやから、力はでかかったわけやけど。

そういう意味で、自分は金沢の平和運動センターの専従という役職についても、住まいはこっちにしたということや。自分が原発の問題に関わる比重の大きさが、逆にそれでとてもはっきりした。

**Q：　当時、富山の私・たちは、「自主防災」を言えば、原発を認めてしまうことになると反対していました。**

さっきも言ったように、僕は、労働運動の「合法領域」を確保し、拡大していくことが鍵だと考えていたけれど、原発問題でもそのことを意識していた。原子力防災が大事だというよりも、この危険な原発に対してどう運動を続けるのかと必死に考えていたよ。

ただ観念的にそう考えていたのではなく、その頃、羽咋市の公害対策審議会では、もめにもめて、当局から「危険区域は 30km 圏内」と言い出してきて、具体的には、それが攻め口になると考えていた。その後、志賀の町民の会が町長交渉をしたり、署名運動を始めたりして、原発事故の防災対策を求める運動が、石川全県に拡がった。そのように、実際に当局とのつばぜり合いがあったり、自分たちの所がどうなるのかということで、諦めかけていたヨウ素剤の配布や放射能測定器の配置を要求して、住民が立ち上がるということがあった。それが絶対的なことだというわけじゃないけれど、原発を止めていくことにつながるんじゃないかとは思っている。

僕自身にとっては、原発事故対策というのは、そのように、志賀原発反対運動を通じて 30 年前ぐらいから考えてきたことで、別に「3・11」を契機に始まったことじゃない。だけど、やはり、「3・11」には、間に合わなかったという気持ちもあるな。

## □ 「 3.11 」での労組幹部の「衝撃」発言

「3・11」の後、何人かの労組役員や職員が、「前から多名賀さんが言っていた通りになったね」と言うのを聞いて、僕は本当にガクンときた。県評の方針でも、原発は危険だとか、「原発反対」だとかさんざん言ってきたはずなのに、それは口先だけのことで、あんたらは真剣に考えてこなかったのか。そうならないために、自分たちは裁判闘争をしてきたし、志賀原発差し止め訴訟の金沢地裁の井戸裁判長は、原発の危険性を認めて住民側への勝訴判決を書いたはずなのに、という気持ちだった。本当に危険性が現実になってきたときこそ、運動の本質が問われるということを自分は一番痛感しているが、今さらそんなことを言われて心底、がっくりきた。そういうことも含めて、自分にとって「3・11」は衝撃だったと言いたい。

## □ 反原発運動との関わりを改めて問いなおす

それともう一つ大きなことは、羽咋に住まいを残すことを決めてから、自分の中にあった「思い上がり」にも気がついたことやね。

それまでは、「赤住には地権者がたくさんいたのに、なんで橋さんしか、がんばりきれなかったのか」と正直言って思っとった。あの当時、北電がいろんなコネを使って、原発建設予定地の地権者の住民たちの間に入っとったことは、もちろん僕も知っていたよ。でも、当時は、それがどういうことか、自分ではあまり実感しとらんかったわけよ。そういう意味では、自分も所詮は「応援部隊」として、わあっとデモに行っとるだけであって、いくら団結小屋に常駐しとっても、結局、そういう立場で行っとるのでしかないことに気付かされた。

繰り返しになるが 90 年に羽咋市の幹部と北電羽咋支店の幹部が二人そろってやってきたときに、「ああ、こいつらは、こんなふうに親切そうな顔をして、日常生活の基本みたいなところにまで入り込んできて、いつの間にか気を許してしまうような関係をつくってしまうんやなあ」と、思ったね。そういう意味では、やっぱり、それだけ周囲からいろんな圧力や「利益誘導」を受ける中で、地元の住民はやっているということを実感したね。そういうことも含めて、これまで通りに羽咋に住まいを置いて、反原発運動にかかわり続けることを決めてから、自分と反原発運動とのかかわりというのがね、「応援部隊」ということを越えてもう一歩深まったというか、それ以後、自分にとって反原発運動は、だいたいそういうことになっちゃったなあ。

## □ 「勤労協」運動について

**Q： ところで、「勤労協」がどのようなものかについて、私・たち自身がよく分かっていないところがありますが、地区労がなくなって「勤労協」が地域の労働運動を中**

**心的に担うようになったと思うのですが、「勤労協」という組織はその前からありますよね。多名賀さんがしてこられたこととの関連でそうした経緯についてもお聞きできれば、と思います。**

「勤労協」自体はね、ある意味で地区労よりも古いところがある。

地域で自営業を営む納税者の「組合」というか、商工会など、実際にメリットのある保守系の団体はいろいろあるでしょ。その一方で、僕らのような勤労者は「天引き」で税金をそのまま取られている。それに対して、地域の勤労者が納税者として、自分たちの組織をつくって、商工会に加盟している連中ばかりではなく、自分たちが行っている事業や活動に助成せよとか、自分たちの会館に助成せよとかといった、いろんな要求をするわけだ。こんな運動は全国的にあったんだけど、それは総評が意識的に指導したんではなくて、そのような運動が、「勤労協」として自然発生的に全国的に生まれていった。

ただ、石川県やいくつかのところでは地区労の再編成ということをやり出した。そのきっかけとしては、地区労の維持が財政的に難しくなったということがある。さっきも言ったように、かつて石川県評に専従職員が８人いて、羽咋地区労として志賀原発反対運動に取り組めたのも、それだけ財政的に余力があったからだよ。小松には自衛隊基地の問題があって、そこに８人の専従役員の１人を派遣するということもあった。

そういった問題と併せて、自分としては、それぞれの地域の運動にも手がかりをもちたい、切り口を作りたいということや、年に 1 度の懇親会やバス旅行だけじゃなく、各組合の退職者をそのままにしとくのはもったいないということで、なんとか活性化できんか、組織化できんかと考えていた。

地区労というのは、ある程度の数の労働組合がないと成り立んので、地域の中心都市じゃないと作れんということがある。結局、民間労組の数が少ないと、地区労の中に、地域の公務員組合と教職員組合だけになっちゃうからね。富山には、農協の労働組合があるが、石川県には農協労組すらないので、よけいそうなってしまう。

一方、「勤労協」だと、職場がそこにあるかないかに関係なく、どの市町村であってもそこに居住しているということだけを条件として組織を作れるんだよ。

**Q：　石川県の中でも、能登は「勤労協」が強いと聞いていますが、その辺はどうでしょうか。**

今は、そうでもない、むしろ河北郡も含めた加賀地区の方が「勤労協」の運動が残念ながら強くなっている。やっぱり、能登地区では地区労の運動が絶対やったんや。それがなくても「勤労協」さえあればいいということじゃない。能登地区の「勤労協」が強いということはない。「地区労」運動が弱体化したんよ。

とにかく、能登地区では労働組合の数や組合の人たち自体が非常に減った。自治労が「地区労」から抜けたし、次に教職員組合にしても、能登では過疎化で「少子高齢化」がどんどん進んでいるので、数はどんどん減っているわけだ。羽咋市では、僕が来たば

かりの頃は、教職員組合の組合員が 500 人近くおったけど、それが今では 200 人を切っとるから。そのような意味で、能登地区の「地区労」運動というのは、かろうじて七尾市の「全港湾」と「林ベニヤ」といった民間の労働組合があることでなんとか成り立っているような状態だよ。地区労の核になるのは、どの地域でも自治労やけど、やはり、民間企業の労組が入ってないと力をもてない。残念ながら、今言ったようなことが、現実やね。

## 労働運動・反原発運動の現状と課題

### □　左翼的労働運動の失速

この間、左翼的な労働運動の力量は、実際にどんどん失速しているからね。それに対して、ただ「連合」はけしからん、というようなことだけ言っていても、どうしようもなくなっている。まともな労働運動がすっかり力を失っていて、既存の労働組合がそういう運動を展開できる力量をもてなくなっているという状況だよ。だから、労働組合が職場で力を失っている中で、いくら街頭で「安保法制反対」や「憲法改悪反対」ということを訴えてみたところで、それは純粋に街頭的な市民運動以上に展開できるわけじゃない。

**Q：　労働運動といった社会的な領域の活動や集団性に裏打ちされることが何もないまま、街頭に出てアクションを行ってみても、あまりはかばかしいことにはならないのではないかという思いが、多名賀さんとしてはあるのですか。**

それはそうじゃなくて、現実に僕のように仕事を辞めて既存の労働組合にいない者たちもたくさんいるわけで、やれることというのは現役世代とは違うはずだ。そういった者たちも含めて活動するような運動体をつくるのに失敗しているということだよ。

まあ、この頃は、それ以前に、自分の体がついていかんということがあるわけで。

ただ、そのようなことで言うと、「連合」がどんどん強くなって、県評を解散したいと言い出したときに、かつての労働組合の幹部や OB の連中が県評の事務局に来て、「俺たちが役員やったときには、こんなていたらくではなかったのに、これでは『連合』がのさばるのもあたりまえや」とか、なんとか言って帰って行くわけよ。それに対して、当時は、「馬鹿たれ！自分たちが厳しい状況の中で対応しながら、労働運動をやっているのを、この連中はどう考えているんだ」、「自分が OB になっても絶対にこんな言いぐさだけはせん、したくないな」と思ったね。

「今は自分たちは労働運動の現役ではないから、現役とは違ったやり方で、こういう運動をやっとるよ。実際に労働組合にいる君たちもがんばってくれ」と言うのであれば、まだ分かるけど、それが筋でしょ。けれども、そんなくだらないことしか言わない。本

当に「おのれら、何をやっとんだ」と言うしかない。

## □ （旧）社会党・総評ブロックの根本的な欠陥

「勤労協」では、反原発の統一方針で運動していた。「3・11」以後は特にそうしていたし、それ以前から能登地区の「勤労協」は、地区労も含めて反原発で一貫してきた。しかし、僕はいつも集会や講演の中で、本当に原発の危険性が現実になってきたときにどうするんだ、その時にこそ運動の真価が問われるのだ、と言うのやけど、石川県評の運動でも感じていたことだけれど、既存の労働運動組織での反原発闘争について言えば、そのことが本当にどこまで共有化されているのか、正直言って心許ない。

90 年ごろのことだけど、それまで原発が危険だ、危険だとあれほど言ってきたのに、実際に志賀原発の建設工事が始まると、「勤労協」の幹部連中は運動を勝ち負けで考えとるので、建設工事を止めることができない以上、すでに勝ち負けが決まっているということで、原発の危険性を訴えることが尻つぼみになっていく。しかし、僕は、それまで原発の危険性をあれほど言っときながら、いよいよそのことが現実のものになってきたときにどうするんや、とずっと思ってきた。そういう時の運動のありようというのは、おそらく社会党・総評ブロックの根本的な欠陥やと思う。

僕は、普段はワーワー言わなんだけど、とことんそのあたりを考えぬいて、自分たちの生存を賭けて考え、今回は必ず言うことにしようと思った。

自分の家の中で考えても落ち着いて考えれんし、逆に一人で考えてもだめなんで、団結小屋へ行って、目の前の北電の準備工事が進んでいるのをにらみながら、原子力防災のことを考えたんよ。原子力防災が大事やから考えたというよりも。とにかくも、このまま原発を許して、北電の完全な企業支配になっちまったらダメだと。みんなが口を開かんようになるのが怖いし、口を開かんようになったら終わりやからね。何でもいいから原発に対してみんなの口を開いてもらうことが必要なんだからということで、原子力防災を問い直すことを考えた。団結小屋の中で、1 年間、座禅を組んで考えたようなもんや。

このあたりが血の気が多かったというのかな。石川の労働運動の中で、多名賀という反原発運動にのめり込んどる奴がいるぞ、とよく言われとったよ。今のような時期だからこそ、自分たちが言ってきた反原発の方針やアピールというのは、何だったんだということが問われとんや。

## □ 既存の労働運動が問われている

なぜ原発・基地が止められないかといったら、それは日本が完全にアメリカの「属国」だからなんや。別にアメリカに呼びつけられてどうのこうのと言われて決まったのではなく、日米合同委員会で実際上は全部決まっとる。

唯一それに逆らったのが、民主党政権時代の首相だった鳩山由紀夫さんで、辺野古新

基地建設の方針に逆らった途端に、マスコミも含めていろんなところからまるごとバッシングされた。そういう構造に直接触れるのが、基地と原発問題でしょ。いろんな課題が一般的にあるわけではなくて、物事を真剣に考えれば、否応なくそこにぶつかる。結局、そういう真剣さが既存の労働運動にはなかったというか。

労働運動の中でも、職場の闘いだけではだめなんで、やはり日本の政治全体を変えないかんということを言っていたけど、本当の日本の政治に向き合ったということはなかった。逆に言えば、原発問題に関して、多くの市民や住民が、こんなに真剣に日本の政治や社会全体の現状について考えてきたし、そんな運動が他にあるかということだ。しかし、既存の労働運動は、原発問題の深さや重さを取りあげないし、分かっていないという、そのあたりに一番の欠陥があるのかな。今改めて、僕が変わっているんじゃなくて、既存の労働運動が異常なんだ、と思ってるが、このような現状で、いかにして運動を持続していくのかが本当に問われているんじゃないか。

今日の僕の話は、これくらいにしとこうか。

## おわりに

伺う少し前までは、多名賀さんは体調がよくなく、お話を聞くこと自体を心配していました。

今回は、運動にかかわるきっかけになった青年期、労働運動、反原発運動の真ん中で、県評の専従オルグになった時期のことを語ってもらって、その熱気を感じました。

ZINE・16 にする際に、お聞きした順番ではなく、編集者が順序を入れ替えながら、多名賀さんの熱気を伝えようとまとめたものです。多名賀さんが運動にかけた情熱の一端と人となりを少しでも読者のみなさんに伝えられることを望んでいます。

発行の際に、丁寧に校正していただき、感謝します。

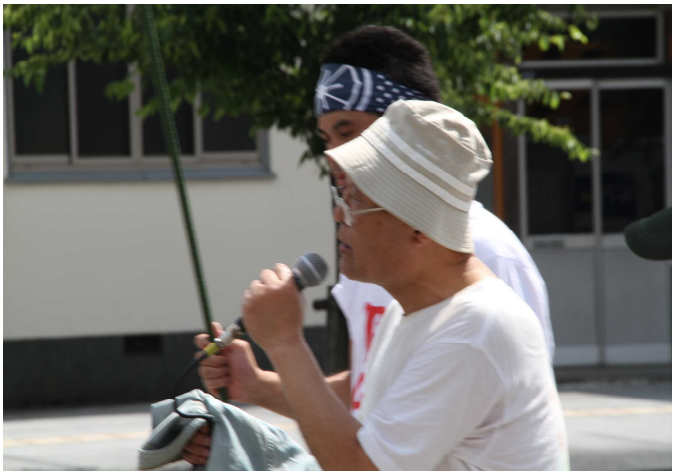
多名賀さん、今後も「血の気の多さ」を維持し、健康ですごしてください。

# 能登の風に吹かれて
# 多名賀哲也グラフィティ

2002.6.1　浜岡集会で
命のネットから連帯の挨拶

2002.6.1　浜岡集会で
「地震の前に原発を動かすな」デモ行進

2011.6.11　能登のみなさんと
脱原発100万人アクション(富山)



2011.6.11　富山で街頭で訴える
脱原発100万人アクション(富山)

2012.1.29　富山で第２回セミナー
地域自治体と原子力防災計画
末田一秀(富山)

2012.1.29　富山で第２回セミナー
末田さんの話を聞き入る

**〈越境〉ネット・富山　　セミナー：地域住民／議員／自治体が共に学ぶ**

Ⅰ．地域自治体と原子力安全協定

菅原慎悦　（東大大学院工学系研究科原子力国際専攻／日本学術振興会特別研究員）

Ⅱ．地域自治体と原子力防災計画

末田一秀　（「はんげんぱつ新聞」編集委員／自治労脱原発ネットアドバイザー）

**Ⅲ．専門家幻想を超えて**

**地域自治体の原子力行政の改革への直言**

**多名賀哲也さん　（前石川県平和運動センター事務局）**

2012.2.19　富山で第３回セミナー
専門家幻想を超えて
地域自治体の原子力行政の改革への直言

2012.9.1　再稼働ストップ
志賀原発を問う地元住民集会で(羽咋)
挨拶をする

2012.9.1　再稼働ストップ
志賀原発を問う地元住民集会で(羽咋)

2012.9.1　羽咋市役所前で座り込み
テント村行動(羽咋)

2012.9.1　羽咋市役所前で座り込み
テント村行動　集合写真(羽咋)

2012.9.1　羽咋市役所前で交流
多名賀さんの話を聴く　(羽咋)

2012.9.1　羽咋市役所前で交流
運動の現状を報告する　(羽咋)

## 12日間続いた座り込みテント村行動

市役所前座り込み行動で、「経産省前テントひろば」から代表参加したＳさん、京都・大阪・富山の仲間、そして地元メンバーで交流会をもつ。

9月1日から始まった座り込みテント村行動を本日12日の総務常任委員会での請願採択を区切りにして、終了。　(「命のネット通信」より)

2013.4.13　再稼働阻止全国ネット
羽咋合宿　討論会で(羽咋)

2013.4.13　再稼働阻止全国ネット
羽咋合宿で　集合写真　(羽咋)

2014.3.8　反原発　風船プロジェクト
風船をもって(赤住現地)

2014.3.8　反原発　風船プロジェクト
志賀原発　ゲート前集会　(赤住現地)

2014.3.8　反原発　風船プロジェクト後
団結小屋で挨拶をする
小雪が舞う寒い日だった　(赤住現地)

2014.3.8　赤住　橋さん宅で交流会
(赤住現地)

## 多名賀哲也さん　略年表

1943年3月19日　東京で生まれる
1944年　宮津町(現宮津市)に疎開
1949年　宮津小学校入学
1955年　宮津中学校入学
1958年　宮津高校入学
1960年　宮津高校3年　60年安保
1961年　大阪市立大学　入学
1965年　大阪市立大学　1年留年し、大学院をめざす
1966年　大阪市立大学　卒業
1966年　兵庫県職労　書記　1966～1981年
1981年　兵庫県職労　退職
1982年　石川県評オルグ　1982～1990年　羽咋市に住む
1989年　総評解散
1989年　連合結成
1990年　平和運動センター専従オルグ　1990年～　2003年
　　羽咋市在住を決め、金沢本部に通勤
2003年　平和運動センター　退職
2001年　命のネットワーク結成　会計部長
2012年　命のネットワーク　代表
現在　　命のネットワーク　事務局長

2015.7.1
志賀原発は今すぐ廃炉に7／１
集会で

# 刊行物案内

ＺＩＮＥ・２　2014・秋
　　〈フクシマへ〉折り返すことにむけて
ＺＩＮＥ・３　2015・春
　　さよなら　私の死者・たち――「困民丸」の小さな歩みから
ＺＩＮＥ・４　2015・夏
　　「敗戦 / 戦後 70 年」は私・たちの〈問い〉か
　　――「ラウンドテーブル・2014」での論議から
ＺＩＮＥ・5　2015・秋
　　アンラーニング・2015　問いをもちよる
　　――施設で考えた中途半端な支援と労働
ＺＩＮＥ・７　2016・夏
　　私・たちの来歴
ＺＩＮＥ・８　2016・夏
　　「階級」という問題の来歴：資料リスト　00 年代から現在
ＺＩＮＥ・9　2016・夏
　　我田引用「ヤサグレたちの街頭」考
ＺＩＮＥ・10　2016・秋
　　NO WAR, BUT UNDERCLASS WAR ！
　　アンダークラスは〈横謀〉する
　　ON THE STREET ／ IN THE NIGHT @ TOYAMA
ＺＩＮＥ・12　2017 年・冬
　　復刊　2008 年パンフレット
　　「米騒動 90 年」:「米騒動」から何を受け取るのか
ＺＩＮＥ・13　2017 年・冬
　　復刊　2009 年発行「ニューズレター」
　　〈背後〉の未来が現在と出会うとき――浦島太郎物語
ＺＩＮＥ・14　2018・春
　　「熊谷６人殺害事件」のためのノート
ＺＩＮＥ・15　2018・春
　　「米騒動」100 年　プレ企画：〈68 年〉から 50 年
ＺＩＮＥ・15　別冊　2018・春
　　「米騒動」100 年　プレ企画：〈68 年〉から 50 年　資料集
ＺＺＩＮＥ・16　2018・夏
　　中断していた古い「年表」を書き継ぐ―〈前註〉
　　〈生のサンジカ〉というキイワードへの途のり

生・労働・運動ネット富山　2018・秋

代表　埴野　謙二

〒 930-0009 富山市神通町３－５－３
TEL：076-441-7843　Fax：076-444-6093
URL：http://net-jammers.net/
E-mail：jammers.net.tym@gmail.com